

大学史資料室通信

- ◆図書館所蔵の造園関連貴重書の紹介 その一『都林泉名勝図会』 鈴木 誠 教授
- ◆東京農業大学 世田谷校地前史 内村 泰 名誉教授
- ◆東京農業大学の人々(六) 一田中芳男ふたたび— 友田清彦 教授



『都林泉名勝図会』 全5巻6冊(*)

図書館所蔵の造園関連貴重書の紹介

その一『都林泉名勝図会』

東京農業大学図書館には、造園関連の貴重書三件が登録所蔵され、図書館HPにてその電子画像データが公開されている。

北村援琴『築山庭造伝』(つきやまにわつくりでん/つきやまていぞうでん、一七三五、六冊)、秋里籬島『都林泉名勝図会』(みやこりんせんめいしょうずえ、一七九九、五巻六冊)、秋里籬島『石組園生八重垣伝』(いしぐみそのうやえがきでん、一八二七、二巻)である。

図書館所蔵の『築山庭造伝』は、大正七年(一九一八)の復刻版で前篇上・中・下、後編上・中・下の六冊からなる和綴じ本である。しかし、実はこの本は秋里籬島が北村援琴『築山庭造伝』(一七三五)を復刻して前篇とし、合わせて自身が著した後篇を加えて上下六冊として編集出版した一八二八年版行本の大正時代復刻版、というのが正しい理解である。すなわち、公開されている図書館所蔵の造園関連貴重書の全ては、その原本が秋里籬島の手になる江戸時代の版本なのである。

この秋里籬島の三点の書籍に共通するのは、豊富で詳細な図版と解説、そして実用に応える書物だということだろう。

今回から三回にわたり秋里籬島の三点の書籍について紹介していきたい。

秋里籬島(あきさととりとう)

秋里の生没年は不詳である。号を籬島軒といい籬島軒秋里とも称している。主に、江戸時代後半の寛政・享和(一七八九〜一八〇三)、文化・文政(一八〇四〜一八三〇)の頃に京都を中心に活躍した。江戸後期に流行し数多く版行された『名所図会』のさきがけ『都名所図会』(一七八〇)の編著者として広く知られている。秋里の「名所図会」ものはその後、大和(一七九一)、和泉(一七九六)、摂津(一七九六〜九八)、近江(一七九七)、東海道(一七九七)、河内(一八〇一)、木曾路(一八〇五)などを冠して次々と版行された。これらは古来からの近畿圏の名所をほぼ網羅し、さらに京都を再度舞台として「都(京都)」「林泉(庭園)」と「名勝(風光明媚な景勝地)」を主題とした『都林泉名勝図会』を一七九九年に版行したのである。秋里の「名所図会」は関西を中心として名所の現地に取材し、詳細な図版と解説を付した図会により当時多くの人々を魅了したようである。

さて、庭と景勝地に特化した図入り名所案内『都林泉名勝図会』は、他に類を見ない庭園の掲載量と質をもっている。造園学的に見て、その内容評価の高さと現代でも利用可能な観点から、造園学の先達たちが原本を利用して現代版を刊行している。庭園のみを抜粋した上原敬二編

『都林泉名勝図会(抄)』(加島書店、一九七五)、詳細な解説を付した秋里籬島著・白幡洋三郎監修『都林泉名勝図会(上・下)』京都の名所名園案内(講談社学術文庫、一九九九)などで、それぞれ農大図書館でも利用できる。特に後者は、手軽な文庫本であり、巻末にそれぞれ収録された林泉名勝の位置図が付されているので、携行して現地を訪れるのにも便利である。しかし、残念ながら両者共に現在絶版。



二巻 銀閣寺林泉(*)

以下今回は、上原と白幡の解説を参考としながら、『都林泉名勝図会』の内容紹介に努めることにする。

『都林泉名勝図会』(一七九九、寛政十一)

農大図書館の貴重図書誌情報の解説には次のように記載されている。

「京都の有名な庭園を図会し各故実由来を解説したものである。本書の凡例に「この書は前板『築山庭造伝』を基とし、京都四方名庭の林泉を聚めて、新に都林泉名勝図会と題す、然れども宮殿、台榭、山閣、水亭、蝸舎、蓬戸の林泉頗る多し、余は他日縁を需めて巡覧し後篇に備ふ」とありて諸寺方丈書院の名畫名筆または什宝虫干の体相の大略をも記してある。巻一を乾坤に分ち全五巻六冊である。」

凡例中の「後篇」は出ていない。本の大きさは縦約二六センチメートル、横約十八センチメートル。版行されてから既に二百年以上を経ているが、京都の庭園にはこの書に描かれた姿とほぼ同じ状況を保っている所もある。逆に言えば、現実の庭園に忠実に版を起こしたとも考えられるし、この図会を元にその後の庭園管理や修復整備が行なわれてきたともいえる。

二〇一六年現在、庭園の修復整備が実施されている京都東山の国指定名勝「智積院庭園」(ちやくいん)は、名勝指定(一九四五年)の理由に『都林泉名勝図会』に描かれた景観を保っていることがあげられ、またその図に描かれた姿を修復整備の目標としている。



三卷 智積院(*)

図会に採録された京都の庭園は約七十。現存していて訪問可能(一部非公開)な庭園は、西芳寺、天龍寺、南禅院、鹿苑寺、慈照寺、霊雲院、退蔵院、等持院、大仙院、龍安寺、成就院、欽持院、霊洞院、妙喜庵、大徳寺方丈、金地院、南禅寺方丈、高台寺、西本願寺対面所、滴翠園、本法寺、知恩院、雜華院、智積院、西翁院など総数の三分の一、二十数庭園に及んでいる。

上述した凡例で「後篇」に備えたという、離宮や門跡級の格式の高い寺院等の庭園は省かれている。現存する省かれ掲載されていない庭園は、京都御所、桂離宮、修学院離宮、二条城、三寶院、曼殊院、青蓮院、園通寺などである。これらの庭園は江戸時代の一般庶民にとっては、極めて敷居の高い場所であった。

庭園図会の観賞方法

庭を描いた図をじっくりと見て楽しむのがこの本を観賞する醍醐味である。そこで、まずは図会観賞の心得として、図の特徴として「凡例」に示されている三項目を理解しておきたい。

一つは、立派な庭では建物は省いて庭主体の図とし、庭といった感じのしない所は建物や風景を専ら描いたという。また、花や樹木は四季にわたって図中に表現している。したがって、梅・桜・蓮・楓の類が同居混在して描かれている。



四卷 龍安寺方丈林泉(*)

次に、庭の遠景も画くようにしており、遠景をもたないものは省いたという。また、図中に人物を画いて庭の大きさの目安としている。したがって、全ての庭の図中に人物が画かれている。

そして、各図には古人の詩歌を添えるか、あるいは今日の名家の詩歌を新たに添え、その中には秋里自身の作になる詩歌や俳諧狂歌も付したと

いう。したがって、図に画かれる風情、その臨場感
は添えられた詩歌などからも観賞すべきなので
ある。

図会を持参して現地に庭園を観賞するか、訪
問したところのある庭の図を観賞するか。どちらに
しても、京都の庭と名勝地をなるべく現地に体
験しての本書の観賞、もしくは本書を携えた庭
園観賞を推奨したい。

『都林泉名勝図会』の評価・価値

『都林泉名勝図会』の価値については、白幡監修
の本(上巻)「解説」を引用しておきたい。

「林泉」「名勝」を標題にした本書は江戸中期
当時の庭園や景勝地を描き今日の文化財につな
がる考え方もいれて解説しているということがで
きるが、現代的に言えば当時の人々が数多く訪
れる人気のある行楽地案内と読みかえてもよい。
図説京都行楽地案内と理解してもよいだろう。
(中略) 本書の挿絵と文章は京都の庭園史、景
観史、社寺変遷史等の貴重な史料にもなってい
る。(中略) 一方、現存する庭園でいうと、二百
年前の姿が描かれた本書は、庭園景観の変遷を
うかがうことのできるこれまた貴重な比較史料
といえることができる。」

解説は次のように締めくくられている。

「読者諸氏が一般の庭園案内書や俗説をその

ままうのみにすることなく、自らの眼と本書とを
用いて自らの庭園観をつくりあげることが期待
するものである。」

この最後の言葉には深く同感させられる。

造園科学科教授 鈴木 誠



五巻 天龍寺方丈林泉(*)

東京農業大学 世田谷校地前史

話の発端 戦前、この場所に自動車神社が在っ
たことを知っていますか？

平成十三年(二〇〇一)三月二十日、東京農
業大学農学部最後の卒業式を行なった。

私たちの農学部農芸化学科が、名実ともに終
焉を迎え応用生物科学部生物応用化学科が誕
生したのである。学科教職員一丸となって、九十
年以上続いた学科史「農芸化学科のあゆみ」を作
成することになった。卒業式当日が発行日であっ
た。

麻生昇平編集委員長(現名誉教授)の下、私
は学科の歴史資料の収集を担当した。

「内村さん、昔この地に自動車神社が在ったこと
を知っていますか？」

「えー、本当ですか？」

私は全く知らなかった。そして麻生先生のこの
言葉がいつも頭の隅にあった。

それから十五年後、昨年九月のことである。
学科の同窓会で麻生先生にお会いして、この話を
聞き返した。

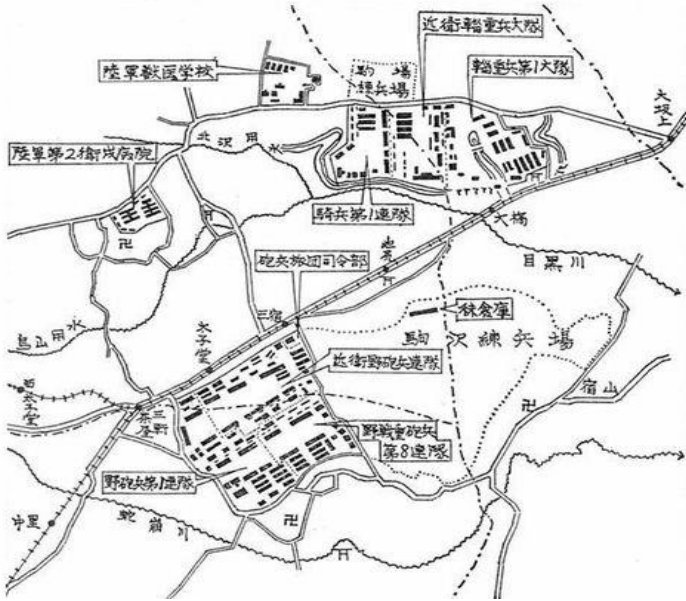
資料を送って頂き、改めて世田谷校地前史と
してまとめてみた。

世田谷の軍事施設

明治政府は、西南戦争をもって維新揺籃期に終止符をうち、資本主義と軍国主義いわゆる富国強兵に邁進することになる。まず近代的な軍事力の育成に向かって、維新直後の既存の応急兵営の移転、整備が急務の課題であった。明治初年以来、兵営は旧大名屋敷がそのまま利用されたり、旧江戸城の皇居前広場界限等が利用されていたりしていた。

最初の兵営移転は、明治二十年（一八八七）、東京鎮台歩兵第三連隊の呉服橋から麻布への移

大正末期 世田谷の軍事施設



世田谷界限の軍事施設

移転・設置 時期	施設名	所在地
明治24 1891	騎兵第一大隊(明29連隊となる)	池尻
25 1892	近衛輜重兵大隊第一中隊營(明26大隊となる)	池尻、上目黒
30 1897	駒沢練兵場	下馬、三宿、池尻、上目黒
31 1898	野砲兵第一連隊營	下馬
31 1898	近衛野砲連隊營	太子堂
32 1899	野戦重砲兵第四旅団司令部	三宿
33 1900	陸軍第二衛戍病院	太子堂
42 1909	陸軍獣医学院	下代田
40 1911	野戦重砲兵第八連隊	下馬
40 1911	野砲兵第一連隊	下馬
大正14 1925	陸軍自動車学校	世田谷
昭和4 1929	陸軍衛生材料廠	用賀

転であった。それに引き続き旧兵営は、赤坂、青山、麻布、四谷等の地に移されていた。しかしその後、増加した兵力の収容とその訓練にとってはまだ不十分な状況で、より郊外の大規模な兵舎と本格的な練兵場の設置が企図されていた。

江戸時代享保期から將軍家の御鷹場として駒場野がよく利用されていたが、この御鷹場がまず真つ先に軍用訓練適地として目されている。

まず最初にこの地に移転してきた兵営は、陸軍騎兵中佐 秋山好古率いる騎兵第一大隊の精銳である。この兵営の東隣に新設の近衛輜重大隊

第一中隊の兵営もできた。

以後陸軍関係の移転が始まり、明治二十四年（一八九一）以降、目黒駒場から世田谷池尻にかけて一大兵営と練兵場が出現していったのだ。こうして軍備増強が進んで日清・日露戦争につながってゆく。明治三十年代前半において、下表のこ

とく世田谷地内に、次々と軍事施設が出来ていった。明治末期には、さながら世田谷北東部一帯は、軍隊の町ともいふべき景観となっていたのである。

農大の正門

世田谷通りから見たことが出来る農大の顔である正門、その正門の門柱は花崗岩と砂岩で出来たもので、二六〇×一三〇×一三〇cmの重量感溢れる名品である。

大正時代の面影を色濃く残し、現代的なスマートさはないかもしれないが、いかにも古色蒼然として重々しい。まさしく農大一二五年の長い歴史を象徴している。

現在、世田谷キャンパスのある場所は、もともと陸軍機甲整備学校があったところで、終戦直後、本学は渋谷・常盤松からここに移転してきた。陸軍機甲整備学校の建物などはしばらくの間教室などとしてそのまま使われ、大正十四年に陸軍自動車学校の正門として建てられたこの門柱は陸軍機甲整備学校を経て農大の正門の門柱として今に残る貴重な遺跡である。（次頁・今の写真、自動車学校の写真）



陸軍自動車学校正門



現在の正門

陸軍自動車学校

大正十四年（一九二五）に発足した、陸軍自動車学校は、昭和十六年（一九四一）陸軍機甲本部の新設に伴い、教育總監から機甲本部長隷下に入り、陸軍機甲整備学校と名称が改称している。

これまで陸軍自動車学校は、大正十四年（一九二五）発足以来、トラック主体の輜重兵学、つまり兵站輸送の運転教育機関であったのだが、昭和十四年（一九三九）九月、第二次世界大戦におけるナチス・ドイツ軍は、戦車を中心とした機械化部隊からなる機甲部隊を活用して戦果をあげていた情報も入っていたこともあり、日本陸軍も機甲部隊の有用性を認識し、航空に特化した陸軍航空本部の先例にならない、機甲部隊の統括機関を設けることにした。

つまり機甲、すなわち戦車等を主体とした機甲部隊の戦略統括機関を設けることになり、陸軍自動車学校は、その組織下に属し陸軍機甲整備学校と名称変更となっている。

因みに輜重部隊（兵站輸送）を養成する機関としては、前年の昭和十五年（一九四〇）に陸軍輜重兵学校が陸軍自動車学校から目黒に分離独立している。

陸軍機甲整備学校は、太平洋戦争後半期に入った昭和十八年（一九四三）に神奈川県相模原

市に移転している。自動車学校が改編された機甲整備学校にも触れておく。

機甲整備学校への改編

陸軍の自動車教育は、初期教育は操縦教育が主であり、整備教育が従であったが、軍・民間における自動車の普及に伴って、操縦教育から整備教育へと重点を転換すべき趨勢になっていった。さらに、軍の機械化、機甲化の推進は陸軍自動車学校の性格を整備重点に転換すべき必然性を高めていた。このよう

な背景から、昭和十六年二月、機甲本部の設置に伴って、同年八月一日、陸軍自動車学校は機甲整



備学校に改編せられた。

しかしこの布石は、事前から進められ始めており陸軍自動車学校研究部の技術部門が、既に昭和十五年三月に陸軍技術本部第五部に移管せられていた。

また一方、実施学校を持たない輜重兵科も十五年十二月一日には輜重兵学校の創設によって念願が果たされたが、これは見方によっては、輜重兵から自動車学校を取り上げた代わりに輜重兵学校を与えたのだとも言えよう。

いずれにしても、陸軍自動車学校は、昭和十六年八月一日をもって廃止されて陸軍機甲整備

学校となり、

大正から昭和

和にまたがる

十六年余の光

輝ある歴史に

終止符を打っ

たのである。

同校学校令

によると、学

校は陸軍機

甲本部長に

隷属し、専ら

機甲車両（も

ろろん自動車

も含まれてい

る）の整備に関する学校ではあるが、重点は戦車、装甲車、牽引車にあったと言える。また研究部の業務も「機甲車両二関スル調査、研究及試験ヲ行フ為」とあり、陸軍自動車学校令と表現はよく似ているが、専ら整備関係に限定されていた。しかし、学校には輜重兵出身の将校、下士官も多数在職し、学生としても入校している。

自動車学校の沿革

帝国陸軍は、明治以来歩兵の移動は徒歩、兵站輸送は馬による輜重車運搬が主力であった。

輜重車とは馬が一頭で曳く荷車で、これでは戦国時代の兵站輸送とあまり変わらない。

明治末期から兵站輸送で貨物自動車利用についての調査・研究がなされていたが、車自体の性能と耐久性が未だ不十分な時代であった。

○大正三年（一九一四）七月

自動車学校設立の為、現東京農大キャンパス桜丘一丁目界隈の土地の買収が開始されている。一坪一円八十銭

○大正六年（一九一七）四月

信濃町の輜重兵大隊の八十名の自動車班がやつてきて、敷地内で自動車の乗り回し訓練や自動車整備の実習訓練が始まった。

○大正七年（一九一八）十二月

東京府荏原郡世田谷村（後の陸軍自動車学校で現世田谷区桜丘一丁目、東京農業大学）に自動車隊が創設され、わが陸軍機械化の先駆となった。

同隊は第一師団隷下の部隊で、将校、下士官、兵に自動車に関する教育を実施するのを本務とするほか、前述の軍用自動車試験班の人員、器材を吸収し、同試験班の任務全般をも継承した。

一般自動車業界の日進月歩の発達、世界大戦での自動車の活躍、自動車編制部隊の創設等により、年を経るに従って委員の担当する試験、研究、調査も広汎多岐にわたり、技術本部、各兵科学学校、自動車隊等の使用、依託では事足りなくなってきた委員直属の試験場建設が要望された。

貨物自動車に加えて、第一次世界大戦に登場した新兵器の戦車についても着目され、英国滞在中の水谷大尉によりイギリスから戦車が一台輸入されている。この戦車を種に陸軍科学研究所が中心となって研究が始まり、運転操作の訓練等もあり、陸軍自動車学校となる敷地内で技術向上がはかられた。

○大正八年（一九一九）二月

練兵場に坂、穴、鉄条網等で妨害物を設置、皇族臨席の下総合訓練が行われたが、車



が穴に落ちて出られなくなった。雪の中の救出が5日ばかりとなった。

○大正十一年（一九二二）十一月

第二次買収で六千坪が坪四円で買上げられた。

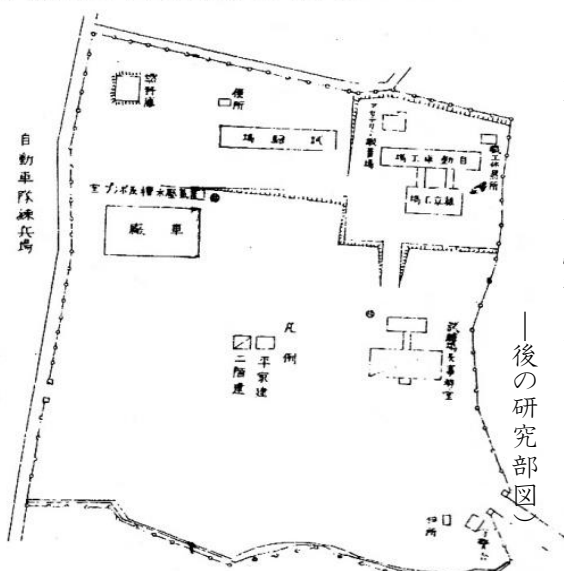
○大正十二年（一九二三）八月

東京府荏原郡世田谷村の自動車隊の隣接地区に敷地一万百餘坪の中に事務所、試験場、工場、車庫等の建物を持った試験場が完成した。

この場所はちょうど現在の農大北門の駐輪場から第一高等学校近辺にあたり、本施設は十四年五月、陸軍自動車学校の創設に伴って、同校の研究部となるのである。

（軍用自動車調査委員試験場建物配置図

軍用自動車調査委員試験場建物配置図



○大正十四年（一九二五）

陸軍自動車学校が設立され、自動車やトラクター、戦車等の運転訓練として整備教育が始る。

○昭和六年（一九三一）

満州事変に際しては、陸軍自動車学校で編成された精鋭の自動車連隊が満州に送られ、陸軍自動車連隊として機動的な活躍をして、自動車兵站輸送の評価・関心が高まった。



調査委員試験場正門、事務室、車庫を望む

しかし陸軍は、自動車自体は、常に地形による制約を受けるということで、それらの使用については抑制が続く、その後の日中戦争においても終戦になるまで馬が兵站輸送、いわゆる輜重の主力を占めていた。

○昭和十二年（一九三七）三月

第三次買収 六百坪 坪六円 馬場設置

○昭和十五年（一九四一）

陸軍輜重兵学校独立

○昭和十六年（一九四二）

陸軍機甲整備学校 名称変更

○昭和十八年（一九四三）

神奈川県相模原市移転

○昭和二十年（一九四五）

八月終戦で解散

○昭和二十一年（一九四六）

東京農大が渋谷より移転

○昭和二十二年（一九四七）

桜丘中学、農大付属高校設立

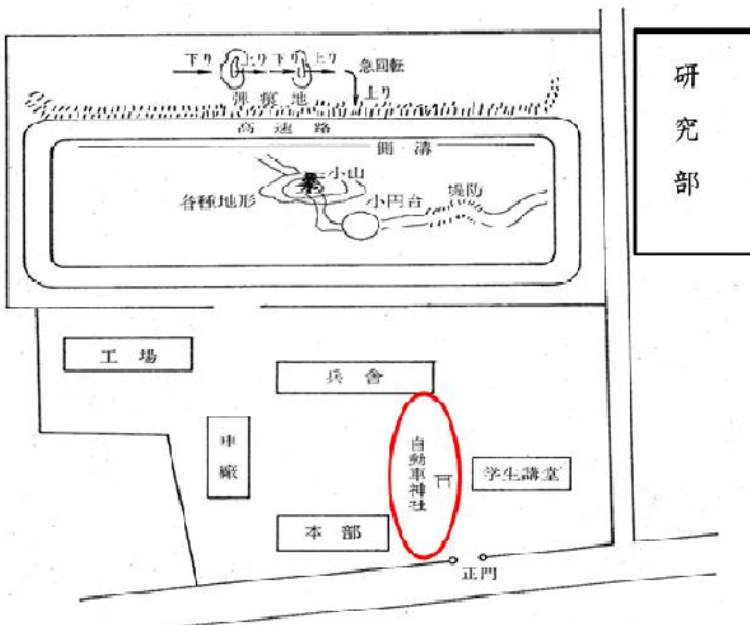
自動車神社の建立

自動車神社の写真を見ると、想像をはるかに超えた立派な神社である。

昭和七、八年頃学校の試験、演習等で事故が多発した。当時学校副官であった中村肇少佐（後に少将、輜重兵監）が、明治神宮の分祀を願い許可を得たので、明治天皇、土地の氏神宇迦迺魂神、学校関係戦没者及殉職者の霊を合祀して昭和九年五月一日に自動車神社を建立した。その



自動車神社



自動車学校見取図

後は同神社の加護を得て事故は激減したと記されている。

その後、終戦により、機甲整備学校は廃止され御神体は、氏神様世田谷八幡宮に遷しました。

世田谷八幡宮では、それから引き続き交通安全のお守りとして車に付ける「自動車神社御守」と身につける同肌守を奉製し、ご希望の方にお頒けしている。因に、世田谷八幡宮の御祭礼は毎年九月十五日で、四百余年の歴史と伝統を誇る奉納相撲があり、依頼されて東京農業大学農友会相撲部が納めている。

○ 自動車神社



昭和 20 年、世田谷へ移転した当初の東京農業大学

その昔、東京農大中庭のマイルストーン、横井時敬像付近に自動車神社が祀られていた。

資料

学校物語「陸軍自動車学校」輜重兵会編 偕行社
座談会「陸軍自動車学校」輜重兵会編 偕行社
偕行社叢書 その巻 座談会「輜重兵概史」 偕行社

世田谷八幡宮 交通安全自動車神社御守の由来
三道楽ノート

<http://blog.livedoor.jp/beckykusamakura/archives/45881783.html>

東京農業大学名誉教授 内村 泰



渋谷から移転した当初

学内にはまだ遺物が点在していた



野球グラウンドのスコアボードのあたりに整備工場が在った



世田谷八幡宮と自動車神社御守

東京農業大学の人々(六)

―田中芳男ふたたび―

本紙の創刊号において、「大日本農会附属私立東京高等農学校の初代校長田中芳男」と題して、拙文を発表させていただいたことがある。本年は、その田中芳男の没後百年に当たる。芳男は、大正五年（一九一六）六月二二日、七七歳で没しているの、そこから数えて百年である。芳男がその基礎を築いた国立科学博物館では、没後百年の記念展示を企画していると聞き及んでいるし、幹事長・副会頭などとして発展に尽力した大日本農会では、機関誌『農業』五月号に顕彰企画としての記事を掲載することになっている。そこで本稿では、田中芳男を再度取り上げ、改めてその経歴と業績について紹介してみたい。なお、芳男に関する著述は、かつては専門書以外に存在しなかったが、近年では、モリナガヨウ『据拾帖―東京大学の学術遺産―』（二〇一四、KADOKAWA）など、一般書も出版されるようになり、知名度が上がりつつある。ちなみに、『据拾帖』とは、芳男が、約六〇年間にわたって收拾した様々な資料を、貼り込んだスクラップ帖で、現在は東京大学総合図書館の「田中芳男文庫」に収蔵されている。



飯田市にある田中芳男と弟・義廉の顕彰碑
(筆者撮影)

田中芳男は、天保九年（一八三八）八月九日、当時の信濃国下伊那郡飯田中荒町（現・長野県飯田市）に、医師である田中隆三（規定・如水）の三男として生まれた。郷里で学問の基礎を身につけた後、安政四年（一八五七）、二〇歳にして尾張の伊藤圭介の門に入り、本草学等の研究に従事した。師の圭介は、江戸時代末期から明治期にかけての日本を代表する本草学者・植物学者で、わが国の理学博士一号としても知られる。先に挙げた『摺拾帖』が始まったのは、この頃からである（大正五年までに九八冊）。芳男は、万延元年（一八六〇）にいったん郷里飯田に戻ったが、翌文久元年（一八六一）、幕府の蕃書調所に物産学の部局が設けられ、伊藤圭介が同出役となるのに伴い、江戸に出、翌年には蕃書調所物産

方手伝出役に任命された。のち、蕃書調所は洋書調所、開成所と名称が変わったが、この間、西洋野菜等の試作、目録作成などを試みている。慶応二年（一八六六）パリ万国博覧会出品用の昆虫採集（フランス文学者として著名な奥本大三郎氏の言う「虫捕御用」）に従事、年末には万国博覧会の事務官としてパリに出張した。この時、パリで植物園・動物園・博物館機能を兼ね備えたジャルダン・デ・プラントを見学し、大きな影響を受けた。

帰国後、間もなく徳川幕府は倒れ、明治元年（一八六八）には明治新政府の指揮下に入った開成所の御用掛となった。開成所は、開成学校、大学校分局、大学南校とめまぐるしく名称が変わったが、明治四年（一八七一）、大学を廃して文部省が設置されると、芳男は文部少教授、博物館掛などを勤めた。明治六年（一八七三）、ウィーン万国博覧会に一級事務官として出張、帰国後の明治七年（一八七四）内務省勸業寮に出仕した。内務省勸業寮とは、大久保利通らによって推進された殖産興業政策を担当する中央官庁で、その農政部門はのち勸農局として独立した。明治八年（一八七五）、米国のフィラデルフィア万国博覧会に事務

官として出張、帰国後の翌九年（一八七六）二月には内務省権大丞に就任した。この年十一月、現在の目黒区駒場の土地を調査して、農学校の建設用地を定めた。この農学校が、のちの駒場農学校で、その後身が東京大学農学部となる。明治一〇年（一八七七）内務省権大書記官、明治一二年（一八七九）には勸農局・博物局事務取扱となった。この間、第一回内国勸業博覧会の審査官を務めたり、小笠原島にコーヒーなどの移植を図ったりしている。

明治一四年（一八八一）四月、新たに農商務省（現在の農林水産省）が設置され、内務省勸農局などの事務が同省に移管されると、芳男は同省大書記官・農務局長に就任した。農政担当のトップである。また、この年、わが国初の全国的規模の農業結社として大日本農会が設立されるが、芳男は創設と同時に同会幹事となった。ちなみに、会頭は皇族から北白川実宮能久親王、幹事長には農商務省で卿（現在の大臣）に次ぐ地位にあった品川弥二郎が就任している。大日本農会において、芳男はその後、明治一八年（一八八五）から数回にわたって幹事長に選ばれ、明治三五年には副会頭に任ぜられている。前出拙稿にも記したが、東京農業大学の前身であった大日本農会附属東京高等農学校の初代校長に就任したのはこの頃である。芳男は大日本農会以外に

も、大日本山林会や大日本水産会（大日本農会と合わせてこの三つの会を三会と呼ぶ）の幹事長・会長を務め、また日本園芸会副会頭、大日本植物協会副会頭、日本材木業連合協会会長など、農商務省に関連する団体の役員を歴任した。

明治一六年（一八八三）、芳男は元老院議員に転出し、農商務省から離れたが、その後も繭生系織物陶漆器共進会審査長、水産共進会審査長、内国勸業博覧会審査部長・評議員、農商工高等会議臨時委員など、農商務省に関連した要職を歴任、また小野職愨との共著ではあるが、芳男の代表作とされる『有用植物図説』全七冊を始め、『水産名彙』『林産名彙』など、農林水産業に関連する多くの著述を著している。

明治二三年（一八九〇）帝国議会が開かれる

と、貴族院議員に就任、藍綬褒章を受章した。同年、三重県伊勢市に神宮農業館として現存する神苑会農業館建設委員長となり、翌二四年には開館にこぎ着けた。農業館は現存するものでは、わが国最古の農業博物館である。農業館の展示資料については、芳男の編纂になる『農業館列品目録』が、明治三三年（一九〇〇）に刊行されている（明治四四年「一九一一」に第二版刊行）。

明治三九年（一九〇六）には、これまでの功績により、勲一等瑞宝章を受章、帝国学士院会員となり、さらには大正四年（一九一五）には、わが国の学術並びに産業の発展に果たした勲功により、男爵の爵位を授けられた。

大正五年（一九一六）六月、神経痛に胃潰瘍を併発、重態に陥ったため、同月二一日、特旨をも

つて従二位に叙せられたが、翌二二日、本郷区金助町（現在の文京区本郷）の自宅で逝去した。享年七七歳であった。二四日、谷中斎場で神葬祭が行われ、谷中墓地に葬られた。

国際食料情報学部長 友田 清彦

飯田市美術館にある
田中芳男の胸像（筆者撮影）

編集後記

図書館が有する貴重書の紹介は、造園科学科教授鈴木誠先生による造園関連貴重書の紹介全三回が始まりました。大学の歴史に関して名誉教授内村泰先生が寄稿してくださいました。教育後援会発行の『農大書報』に十回の連載で農大の歴史を紐解くご寄稿をさせていただきました。本稿はその続編でしょうか。食料環境経済学科友田教授による「東京農業大学の人々」も創刊号から続いております。

大学史資料室通信も、本号で第10を迎えました。数々の先生方のご寄稿のお蔭です。御礼申し上げます。ありがとうございます。

本年四月に第二一代図書館長 北田紀久雄先生を迎えました。創立一二五年を新しい体制で迎える図書館と大学史資料室をよろしくお願い申し上げます。

*本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話… 03-5477-2526

FAX… 03-5477-2546